

上州民謡の特質

浅野建二

〔一〕 上州の風土性と民謡

概していえば、明るく乾燥した、雨天や曇天の少ない上州（群馬県）の風土・気候と、陽気で淡白で、古い伝統に固執せず、常に新しい流行をとり入れることに積極的であるという県民性の然らしめるためか、本県には比較的古い伝統というものが育ちにくく、従ってそれだけ東北や信州・越後・北陸地方などに比べて、民謡の遺っている数が極めて少ないといわれている。

これを過去の文献・記録に徴して見ても、例えば江戸時代の唯一の全国民謡集として知られている『山家鳥虫歌』（明和九年刊）には、上野国の歌として僅か3首しか見えていないし、明治以後の民謡資料でも、大和田建樹編『日本歌謡類聚・下』（明31）に、佐波・新田・山田・吾妻郡地方の「田植唄」が5首と山田郡地方の「粉挽唄」が1首、新田郡付近の「麦搗唄」が3首出ているに過ぎない。その粉挽唄の1首も、埼玉・千葉方面から流行り出した「おいとこ節」で、「ヨイトコソオダヨ、粉屋の娘が……」で始まる歌であるから、純粹の本県民謡は田植唄と麦搗唄だけといってよからう。但し、高崎その他の地方の童唄として9首ほどの入手まり唄Vが見えるのが珍しく思われる。

次に前田林外編『日本民謡全集』（明40）正・続二冊には、「盆唄」3首、「雑謡」5首、「子供唄」即ち童唄1首、「機織唄」5首が見えるが、中でも盆唄の「惣れてつまらぬ山小屋木挽 山が終えれば泣き別れ」や、「雑謡」の中の「木曾のお山はお月を抱きやる わしも抱きたやお十七を」のように、他県の名歌から流用したと思われる歌詞が多いのが目につく。特に館林付近の雑謡として載せてある「ねむの木ねむの木寝やしゃんせ お鐘がなったら起きやんせ」は、美智子妃殿下のお作りになった「子守唄」の元歌ともいふべきものとして注目される。その他、桐生付近の機織唄の「桐生桐生と名はよいけれど 来て見りや桐生は山の中」などという歌詞は、明らかに八丈島の「しよめ節」の「沖で見たときや鬼島と見たが 来て見りや八丈は情け島」の改作のように思われる。

とにかくこの『日本民謡全集』の頃までは、民謡の種類も歌詞の数も少なく、次の童謡研究会編『日本民謡大全』（諸国童謡大全）改題（明42）や、それにつづく文部省文芸委員会編『俚謡集』（大3）及び高野斑山他編『俚謡集拾遺』（大4）あたりから、本県の民謡記録も質・量ともに充実したものが見られるようになったと思われる。

〔二〕 ヤーハノ型田植唄

本県の民謡の中で最も特色ある労作唄といえは、何といつても前橋市区域を中心として赤城南麓一帯に分布している、いわゆる「ヤーハノ型田植唄」と称せられるものだと思う。それについては既に昭和七・八年の実地調査に基づいて、県師範学校の富山昇教諭が『群師紀要（第一輯）』（昭9）に発表されたすぐれた論文があるが、この田植唄の分布を富山氏は勢多・佐波両郡のみでなく、群馬・多野・山田郡方面にまで及ぶと述べている。歌詞が朝・昼・夕方の唄というように、一日の時間によって分けられているのは、中国地方の「囃し田」と共通であるが、通常、節と節との繋ぎ目に「ヤーハノV」もしくは「ハイヤーノV」という囃子詞が入るもので、元来、古代の神楽歌のように短歌形式の歌詞の上句（五七五）の三句目の5音をもう一度反復して下句（七七）に続ける詞型なので、この形式を故町田佳聲氏は「三の句返し短歌形式V」と名づけている。しかも唄を一人の首頭が歌うのではなく、甲乙二人が分けて唱和し、植え子が「ア ソウトモソウトモ」とか、「ハーマダマダー」「ヤレヤレヤレ」という囃子詞を入れるのが特色。音楽的には陰旋法の珍しく美しい旋律の唄で、おそらく座敷唄にも歌われるうちに次第に洗練されたものではないかという気がする。しかも実際に上句・下句の三句目を5音に歌う方が都合がよいので、自然、五七五七七形にまじって、五七五七五形の方が多く歌われるようになった。例えば次の、

甲「朝露に 髪（ホイイ）結い上げて（ハーマダマダー）ヤーハノ花摘めば 乙「花摘めば 小褌がぬれて（ハーマダマダー）」

ヤーハノ花摘めぬ（ハーマダマダー）（朝の唄（前橋市公田町）は、「小褌がぬれて 花摘めぬ」を以前は「男が招く 花はたまらぬ」のように、七七形に歌っていたものである。また、

甲「今日の日の 時打つ鐘は 幾つ打つ 乙「幾つ打つ 七つも 八つも 九つも（昼の唄）（勢多郡富士見村）」

この歌が出ると、仕事を止めて昼食にするといわれている。ところで、この五七五七七または五七五七五形の唄は、元来、室町小歌の流れをくむ京都地方の田植唄が母胎らしく、例えば『関吟集』の中の「やれ面白や、えん京には車、やれ淀に舟、えん桂の里の鴨飼舟よの」という小歌を、京都府桑田・何鹿入天田V郡地方の田植唄では、今でも、

「おもしろや 京には車 淀に船ソヨソノ 淀に船 桂の川に むかい船ソヨソノ」（『俚語集』）

と歌っている。つまり、上州の田植唄は、この「ソヨソノ」という囃子詞を入「ヤーハノV」に変えて歌ったものと考えられる。なおこのような「ヤーハノ型」の田植唄は、本県の他に、東は栃木県の一部（安蘇郡水室村入現、葛生町V・塩谷郡氏家町）から、南は神奈川県（北西部（横浜市戸塚区・足柄下郡箱根町・小田原市）、静岡県御殿場市、山梨県南都留郡忍野村等）にまで広く分布する。更に北は新潟県佐渡郡・同北魚沼郡越後村地方や富山県下新川郡地方にも同系統の田植唄があるので、おそらく京都付近から発生した田植唄が北陸を通じて関東に入ったものではないかといわれている（町田氏説）。

*参考

甲「苗代なうしろの ならしの縄は 乙「イヤ、アノ幾重張るよ 甲「エ張るよ 七重も八重も アノ九重も 乙「張るよ 九重も張る

よ(新瀧原佐渡郡真野村田植唄)

〱田主の背戸にイヤノー 池掘れば 池掘れば 出る水出ず
にイヤノー 酒が湧き出るヤイ 酒が湧き出る(富山県下新川郡
桐山村田植唄)

上掲の京都地方の田植唄は『俚謡集』所載のものであるが、現在
収録されている録音からは次の歌詞が知られる。音楽的には上州の
ヤーハノ型に比べて、やや粗野な旋律型であるが、歌詞そのもの
は、きわめて古い系譜を有するものと思われる。

〱面白や 京にはヨ一車 淀にヤ舟 ソーリヤ淀にヤ舟 アー桂
のヨ一川の帆掛け舟じヤサンヨナー
〱日の暮れにヤ 浜辺をヨ一通れば(イ行けば) 千鳥啼く ヨ
ーリヤ千鳥啼く アーも一つ啼けヨ一 千鳥声くらべよサンヨ
ナーエー(京都府竹野郡丹後町田植唄)

この丹後町というのは元の竹野郡間人町・豊栄・竹野・上宇川・
下宇川の一町四ヶ村が合併して丹後町となったもの(昭和30年2月
1日)。丹後半島の突端、経ヶ岬から西へ間人に至る、日本海に面し
た海岸線の丘陵性台地の一角で、山陰の村といった交通不便な土地
柄、それなればこそかように古い唄も保存されていたものと思われ
る。二番目の歌詞は、伴信友編『中古雑唱集』(天保6)に、

丹波国福智山辺の田植歌

橘窓自語所載、国人岩谷嵩台話

「夕暮に、川辺をみれば、千鳥なく、なけなけ千鳥、声く、べし
やう。と歌ヒテ間々ニとよのとう」トハヤス也。(ら歎)

とあるもの。『橘窓自語』は、京都梅宮の祠官、橋本経亮の著であ
る。この歌も、群馬県勢多・佐波郡地方の田植唄(夕の唄)には、

〱夕暮に浜辺を行けばヤーハノ千鳥啼く 千鳥啼く 又啼け千鳥
ヤーハノ声くらべ

と歌われている。「声くらべ」は、むしろ「声くらべしよう」の略
で、啼く千鳥に対して更に乞い求める意。即ち、美しい千鳥の声を
もっとも聞きたいという願望を表わしたものであろう。

(三) 麦打唄

次に本県の労作唄として特色ある「麦打唄」について述べたい。
二毛作が早くに発達した群馬県は、水田の裏作として小麦・大麦の
栽培が盛んで、茨城・埼玉と並んで麦の産出では全国でも上位にあ
ることは周知の通り。関東平野一円に行なわれるクルリ棒を用いて
のこの農作業は、かなりの重労働なので、おのずから仕事唄として
の「麦打唄」を発達させたものと思われる。上州の麦打唄は大体、
二つの系統に分かれ、一つは赤城南麓一帯に遺っている威勢がよく
テンポも早い、歌詞は七七五形のもの。これは「赤城山から谷間
を見ればヨ一」式の歌詞で、「ハドッコイドッコイ」とか、「ブツ
コメブツコメ」と囃し、歌詞も他の地方の民謡を流用したものが多
い。もう一種は巴楽郡板倉町地方のように、「古河の二丁目の油屋
の娘 油トトロ腰までつけて 腰の光で古河の町照らす」といっ
た七七七七七形のものである。それでは前の七七七五形のもの
として勢多郡富士見村地方のものを聴いて見よう。

〱(アドッコイドッコイドッコイナト) 赤城山から谷間を見れば
ヨ一 瓜や茄子のヤレ花盛りヨ一(アドッコイドッコイドッコ
イナト)

〱雨は降って来る 庭の薪アぬれる 背中の子は泣く 飯アこげ

る

へお婆おばどこへ行く 三升樽さげて 嫁の里(イ在所)へ 孫抱きに
へ男伊達なら アノ利根川の 水の流れをとめて見な

お聴きの通り、やや陰旋がかつた比較的テンポの早い唄で、曲型からは新しいものと思われる。しかも殆どの歌詞が他地方から流用したり、部分的に改めた替歌であることが知られる。例えば「赤城山から」の歌などは、「高い山から」の形で各地の盆踊唄・労作唄・童唄などに歌われている類型歌。その源流は『淋敷座之慰』(延宝4)の「山谷源五兵衛節」、『落葉集』(元禄17)巻四・源五兵衛踊、巻五・須磨名所女踊に発し、近松作『傾城酒呑童子』(宝永4)に、下句「おまん可愛や布さらす」とあるほか、『春遊興』(明和4)や『山家鳥虫歌』(同9)甲斐の部、『浮れ草』(文政5)巻下・宮島節などにも「お万可愛や布さらす」として見えるものである。同じ流行唄本でも『艶歌選』(安永5)には下句を「瓜や茄子の花盛り」とあり、以後は、「お万可愛や」よりも、むしろこの形の方が普及して行なわれた。「雨は降って来る」も各地の田植唄に類歌の多い一首。「お婆どこへ行く」は「岐阜音頭」の別名で岐阜県下の農村に広く歌われる祝儀唄として有名である。

この他に、本県の農耕に関する唄としては、○田の草取り唄(邑楽郡板倉町)○摺すりの白引き唄(勢多郡富士見村・利根郡水上町地方)○稲刈唄(境町歴史資料)などがある。かように麦打唄はあるが、他県に見られるような「麦搗唄」は記録だけで現存しないのも特徴と思われる。

〔四〕 糸挽き唄

さらに本県の伝統産業の仕事唄として、忘れてならないものに「糸挽き唄」と「機織唄」がある。養蚕県群馬として、既に幕末の頃から「坐繰り」と称する手回しの糸巻き器械を完成した本県に糸挽き唄のすぐれたものがあることは当然であって、拙著『日本民謡集』(岩波文庫)の群馬県の部には、これを最も代表的な労作唄として「八木節」や「草津節」よりも筆頭に掲げた思ひ出がある。とにかくこの糸挽き唄は、やはり単調でテンポの早い曲型であるが、唄の終りに「××カネー」という軽い鼻唄風の女っぽい離子詞を入れるのが特色で、私にはこの点が大層魅力的で、いかにも群馬県の女性らしい「上州ぶり」の美しさを感じさせてくれるように思う。それでは、やはり『群馬県・郷土民謡集』付録のソノシートによって、桐生市川内町付近の糸挽き唄を聴いてみよう。

越後出るときや涙で出たが 今じゃ越後の風もいやカネ
信州信濃の新蕎麦よりも わたしや貴方のそばがよいカネ
糸挽き仕舞えば銭湯がたより 銭湯か、ずけに主のそばカネ
糸よ切れるな坐繰りよ回れ 晩のしまいがおそくなるカネ
雨の降る日の暮れ方は 思ひ出します故郷のことカネ
伊香保出でから水沢までは 雨も降らぬに袖しぼるカネ

男伊達ならあの利根川の 水の流れをとめてみるカネ
この他、養蚕に関する唄として、○桑摘み唄(佐波郡境町)○坐繰唄(前橋市国領町)○機織唄(桐生市皆沢・石嶋)などがある。また、「木樵唄」として、吾妻郡中之条町以下、県内の山地带に分布する「木挽唄」や、一本一本の大木を川の流れを利用して下流へ運ぶ時の「小流し唄」と称するものが利根郡水上町と上野町地方にあり、同じく水上町には灌漑用水を引き出す時の「樋引き唄」がある。

更に、左に列挙するような交通（陸上・水上）・劳作・祝儀に関する特色のある民謡が埋蔵されている。群馬県といえは「八木節」をもって代表させるのが通常であるが、その発生のルーツについては諸説あって定かでない、僅かに江戸時代、毎年、日光東照宮に皇室から派遣される例幣使の通る例幣使街道の宿駅である木崎遊郭または旅籠に移入された越後の「新保広大寺くずし」が源流であるという程度のことしか明らかでない。その木崎宿からはやり出した「木崎節」（木崎音頭）は確かにテンポも緩やかな哀調を帯びた節回しのもので、八木節の原調を思わせる。ともあれ、終りに上述の交通・劳作・祝儀等の唄名を摘記して、拙論の結びとする。

- 馬子唄（片品・十石・三国・赤城・嬬恋・碓氷）
- 船唄（邑楽郡千代田村・佐波郡境町）
- 筏流し唄（吾妻郡中之条町・多野郡鬼石町）
- 堤防工事唄（八土羽打唄）（邑楽郡千代田村・佐波郡境町）
- 地形唄（多野郡万場町）
- 春駒唄（利根郡片品村）
- 七福神舞唄（碓氷郡坂本）
- カンカン踊唄（多野郡上野村）
- 飴屋唄（同上）

（あさの けんじ・東北福祉大学）

日本民俗 語大辞典

石上賢著

B5判上製函入
一四三二頁
二二〇〇〇円

半世紀五十年の歳月をかけて
唯一完成された偉業！

「週刊読売」「毎日新聞」で紹介
紹賛好評の民俗語の集大成：。

〈本書の特色〉

- ・特に重要なもの、珍しいものに図版を掲載。
- ・問題点、調べたことの要約など書き込めるスペースを確保。
- ・理解の一助となる研究指標を示す。
- ・二五〇〇項目、十八万語を収載した、伝承生活語を読む辞典。

文正草子の研究

岡田啓助著

「文正草子」の舞台を
丹念に実地踏査し、未翻刻の異本を
集め校合した貴重な成果。

A5判／上製函入／一八〇〇〇円

桜楓社

〒101 東京都千代田区猿楽町 2-8-13

電話 03(295)8771(代) 振替 東京 6-18020